

Moritz Baßler, Bettina Gruber, Martina Wagner-Engelhaaf (Hg.):
Gespenster. Erscheinungen · Medien · Theorien.

熊谷哲哉

本論文集が扱うテーマは、Gespensterである。Gespensterといえば、われわれは一般的におぼけや幽霊といったもの、眼に見える形をとった死者の魂のようなものを思い浮かべるだろう。あるいはオカルティズムや迷信といった前近代的な事象や、幽霊が出現してくる背景にある恐怖心や怨恨や抑圧された願望といった感情を、文学的テーマとして書いた論文を想起することもできるだろう。しかしながら本書が対象とするのは、死者の魂の具現化としての、狭義の「亡霊」だけにとどまらない。編者による導入のなかで、マルクスとエンゲルスが『共産主義者宣言』で述べたところの「共産主義の幽霊」が言及されているように、理論やテーゼといったものも幽霊として現れうるのである。幽霊が出るということは、不在の者があらわれ、うろつく (umgehen) ことである。そして不在であるがゆえに、人々に恐怖を呼び起こすのである。幽霊について語ることは、この不在でありながらうろつきまわっている何かを、縛り上げて悪魔祓いすることに他ならない。デリダが『マルクスの幽霊たち』(1993年)において試みたことも、そうしたものの一つであると編者はいう。

本論文集はミュンスター大学で開催された同名のシンポジウム(2002年10月7日から10日まで開催)を下敷きにしており、文学を中心に幅広い分野の研究者が参加している。幽霊の存在とは、そもそもだれかが「見た」という証言によって形作られる。すなわちはじめから、言説的・論証的なのであると編者は述べている。そしてそれゆえに、文学研究の題材となるのである。しかしながら本論集はそれだけにとどまらず、歴史学、文化学、映画などのメディア学、人類学などの視点も盛り込まれており、内容が豊かであり興味深いものとなっている。

つぎに、より具体的に内容を見てみよう。本書は5つのセクションからなり、合計20本の論文が集められている。第1部「亡霊の出現について」では、中世から19世紀にいたるまでの亡霊にまつわる言説の歴史的な変遷などが論じられている。Neuberは近代初期を、Holznagelは16世紀を取り上げ、PuhleとWolfはともに19世紀における幽霊の出現を問題とし、それぞれゲーテとメーリケについて言及している。

第2部「幽霊についての知」では、おもに心霊主義やオカルティズムといった、幽霊や心霊現

象を科学的・学問的に整理しようとしてきたこれまでの試みと、それが文学史・文化史的にもつ意味についての論文がまとめられている。このセクションではとりわけ、Pytlík によるカール・デュ・プレル論、および Haupt の「光線魔術 — 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのオカルティズムと SF の間のテキスト、ディスクール分析的・比較文学的概観」が世紀転換期における幽霊の問題を扱っている。Pytlík は近年オカルティズムとモデルネ文学に関する包括的な著作 [Pytlík 2006] を発表した。この論文ではとりわけ世紀転換期オカルティズムの中心人物の一人であった、カール・デュ・プレルにおける独自の死後の世界についての見解を、「二つの世界の住人」という用語を軸に論じている。また、Haupt の論文は、太陽光線や赤外線のような光線だけでなく、放射線や動物磁気のような不可視の力なども含む、広義の「光線的なもの」が、世紀転換期の文学作品においてどのように描かれているかを、おもに 8 つの分野に分けて、豊富な資料を挙げて紹介している。「光線的」な文学としてここで挙げられる文献は、心霊学や SF だけにとどまらず、Th・マンやホフマンスタールの作品におけるオカルティズムの受容や、フロイトのリビド理論やシュレーバーの光線妄想なども含まれる。世紀転換期における一つの大きな流行としての光線的・放射的なものと、それを幽霊へと結びつける着眼点は刺激的である。

第 3 部のテーマは「メディア」である。Görling は、デリダ、カフカ、リルケなどとともにクライストを取り上げ、不在の主体および不在の場という問題をサイバースペースと接続している。また、Behrend は、アフリカにおける呪術的世界観の伝統にたいする、ビデオカメラを中心とした視覚メディアの普及の影響を論じている。第 4 部は、「文学・幽霊」と題されて文学研究の視点からの論文が収められている。著者たちはほとんどゲルマニストであるが、論じられる作品はドイツ語文学に限られない。Waller は中国系の M・H・キングストンおよびアフリカ系のトニ・モリソンといった現代アメリカの作家をとりあげ、アジア的・アフリカ的な幽霊の概念が、どのようにアメリカという文脈に翻訳されているのかを検証している。また、Schmitz-Emans は、ポー、ヘンリー・ジェイムズ、マラルメ、マウトナー、ムージルなどのテキストを挙げながら、19 世紀から現代に至る幽霊表象の変遷を追っている。人物の選択がやや定番に過ぎるかもしれないが、それだけに理解しやすいものといえる。第 5 部「理論・幽霊」では、哲学的なテキストの読解を通じて、幽霊の存在に迫っている。とりわけ興味深い論文は、以下の二点である。Weinberg は、哲学的幽霊学としてカント、フロイト、シェリング、ルソー、デリダなどに依拠しながら哲学における幽霊の位置づけをこころみている。また Link は、冒頭の編者の引用にも登場したマルクスとエンゲルスを中心に、イデオロギー論における幽霊の問題という観点から、マルクス思想における二元論的な思考について論を展開している。

以上のように、本書の内容を概観してみたが、ひとことでいうなら「幽霊」というキーワードをさまざまな角度から料理して、各人がそれぞれの文学研究を披露しているという印象が強い。

現在第一線で活躍する文学研究者たちが編者として名を連ねていることから分かるように、論文のレベルは総じて高いが、若干偏りがあると感ぜられるのも事実である。たとえば、文化学や人類学の視点を持ち込んでいるとはいえ、われわれにとってなじみが深く、昨今西欧における文学研究にもしきりに取り上げられている日本の能楽と幽霊についての言及はみられない。また [Loers 1998] が多くの事例を挙げて豊かに展開したような、絵画や身体表現など別の芸術ジャンルにおける「幽霊的なもの」についての語りの分析がないのも少々物足りないといえよう。

(Würzburg: Königshausen und Neumann 2005)

参考文献

Pytlik, Priska (Hg.): *Spiritismus und ästhetische Moderne — Berlin und München um 1900*.
Tübingen / Basel 2006.

Loers, Veit (Hg.): *Okkultismus und Avantgarde: von Munch bis Mondrian 1900-1915*.
Frankfurt am Main 1995.

*

Matthias Bauer (Hg.): *Berlin. Medien- und Kulturgeschichte einer Hauptstadt im 20. Jahrhundert.*

池田 晋也

ベルリンをテーマに、しかもワイマール共和国の社会や文化との関連で何か新しい本を書くということは、実は非常に大変な作業なのではないだろうか。なぜなら、通信網・交通網が整備され、サラリーマンや工場労働者といった都市の大衆が一躍時代の主役となり、大量消費生活が根付いたその時代を現代社会の嚆矢とし、大都市ベルリンをその時代の象徴と見るような観念は、もはやそう簡単に覆されるものではないからである。むしろこうした研究書の生命線は、そのような固定化された歴史観をあえて覆すことよりも、対象をどういう切り口で見せるかということにあるといってもいいだろう。

本論集『ベルリン』は二部構成で、時代的には第一部が主にワイマール共和国期、第二部が主に第二次世界大戦後から現代までを、つまり全体で百年という長さを扱っていることになる。周知のようにこの百年のあいだに、ドイツは少なくとも4回の大きな社会基盤の変化(1918、1933、